



★歌のメモリー 回想五十首選  
「石田比呂志」

選・文 島田幸典 (「八雁」選者)

Yukimori Shinada

生きてゐたくないだけのこと理由などくつつけて気障に死にたる太宰

「初期歌篇」

傷みたる花を正確に撰りわくる手の見えてゐて花を売る店

ひとつずつ衣を脱ぎてゆく踊子を照明燈は放してやらす

「無用の歌」

〈職業に貴賤あらず〉と嘘を言うな耐え苦しみて吾は働く

水槽に冬の水白く溢るれば昼も流浪の猫が来て呑む

軽々と吊り出されたる若ノ花を歩みつつ見つ街のテレビに

抱え持つ七輪の火に輝きて階段を妻の上りくるなり

唐突にテレビの中に起りたる喝采を背に聞きて出で来つ

「怨歌集」

やや高き左側より右側へ雨水は越ゆる舗装路の上

てのひらに載せたる米を食わしめて立てり即ち縊らむとして

「蟬聲集」

唇に残る脂を手に拭い地下食堂街時の感じなし

蠶のものはら吹かれておるからに負けて来たりし馬にあらずや

考えて考えてせし行為の賤しかりしよ眼前の雨

運命は口をひろげておるからに急ぎ近づくというにもあらず

「琅玕」

「いしだひろし」 昭和五年福岡県出身。石川啄木の「握の砂」と出会った歌人を志す。三十四年「未来」入会。「牙」四十九年復刊主宰。歌集十七冊他著書多数。短歌研究賞他受賞。平成二十三年二月二十四日没。享年八十歳。

喃喃と言うのを聞けば西洋の人の言葉もかなしきろかも

横抱きにかかえられたるマヌカンの土を踏まざる黧白し

『長醋集』

墓石店春泥はねて運命のごとくに墓を磨く人あり

ほの暗き未明の水に近づきて自が顔を脱ぐごとく洗いぬ

電車にて神水橋を渡るときわれと向いの人と欠す

二頭いる動物園の麒麟にていかならむそのつれあいとのことは

大根の首切り落すはずみにて首斬り浅右衛門のことを思いぬ

五十歳過ぎて結語をもたざれば夜の酒場に來たりて唄う

『鶏肋』

ばらの木の交差枝切りて小枝切り平行枝切るばらの木のため

蟻ひとつ夜の畳にあらわれて古き聖のごとくに歩く

はらわたに花のごとくに酒ひらき家のめぐりは雨となりたり

『滴滴』

酒のみてひとりしがなく食うししゃも尻から食われて痛いかししゃも

死ぬるときここより冷えてゆくらむか二つふぐりを手にし包めり

春宵の酒場にひとり酒啜る誰か來んかなあ誰あれも來るな

『九州の傘』

梅雨終る阿蘇五つ岳生まれまれにその悲嘆なき全容が見ゆ

集落のあれば必ず墓ありて墓は集落よりも明るし

ゆくりなく今宵枕に護謨の輪が円かなる輪を作りておれり

『才子』

われついに奴の如きに及ばぬか大根抜きし穴に日が差す

## 生に絡みつく哀感

素顔の石田は「無頼」の人ではない。物言いは率直で曖昧さは微塵もないが、心遣いの細やか吐人であった。あの濁声を思うと、咤や冗談とともに、歌や人生についてしみじみと語る穏やかな声、励まし苦勞をいたわる優しい声も聞こえてくる。

一途に歌に打ちこんだ石田であったが、その作品には多面性もあれば変化もあった。「初期歌篇」（石田比呂志全歌集「所収」）には濃厚な感傷性と即物的なりアリズムがすでに同居している。上京した石田は、キヤバレー管理人他数十の職を転々とした。低い視線から労働や生活の真相を捉えた第一歌集「無用の歌」には峻厳な観察眼とともに、対象への深い心寄せがあり、その歌は生に絡みつく哀感を湛えている。

九州西下後、とくに「蟬聲集」から「鶏肋」に到る四歌集では自他に注ぐ視線が冴えまさり、市井の暮らしの諸相が鋭く切りとられる。元來「多弁者」の氣質をもった石田が、言葉を抑えることで摺んだ手法であった。同時に「考えて」「運命は」

〔清貧〕という語に嘘が匂うな唯ありのまま貧乏と言え

〔忘八〕

男なら愁嘆するな焼鳥も串に刺されておるではないか

脱葉を終えし一樹が思わざる寸暇を得たる如くに立てり

〔涙壺〕

子雀は庭の日向にちよんと跳ねちよんと跳びてちよんと跳ぬるも

金槌に釘は頭を叩かれて何だか嬉しそうに沈みぬ

〔老猿〕

人は名の出るを畏怖せよ然りかの豚が肥ゆるを怖るるがごと

蹲りいる御河童の指先が動く蟻から潰しはじめつ

二の腕に止まりたる蚊を口窄め神慮の方へ吹きてやりたり

〔春灯〕

胃を少しcutされしを吹聴す人の心を饗すように

岩の秀に寄せて碎けて散る波が石田さあんと哭いて碎くる

自転車店店頭に人現われて空気注入ポンプを押せり

夜半起きて食い物探している吾が食器戸棚の硝子に映る

〔萍泛歌篇〕

枝離れし桜が着地せんとする地上一寸風が攫いぬ

電灯の紐を探りていたる手がほんに小さな闇を掴みぬ

〔流塵集〕

仰向けになりて亀の子万歳す暗黒時代の子供のように

人、花に咲けと言えば花、人にお前こそ咲いて見せろと言えり

〔邯鄲線〕

捨てられし漬物石が元おりし処に捨ててくれると言えり

のように、含蓄に富む箴言風の作品も現れるが、これも石田短歌の魅力的な一側面である。

石田はまた心に訴えるフモール（ユーモア）を含む、愛唱性豊かな短歌を残した。とりわけ『滴滴』『九州の傘』には、口語的なフレーズを伴う軽妙な調べによって記憶される佳品が多い。「はらわたに」「酒のみで」「春宵の」……。石田比呂志というとまず酒が連想されるのは、こうした歌の印象によるものであろう。

老いてさすがに体調不順を嘆くことも稀ではなくなった石田だが、『春灯』に見えるような、自己凝視・人間観察に裏打ちされた諧謔性は最期まで健在だった。自在にして闊達な表現にしばしば驚かされた。石田短歌では大小の生物・無生物が一貫して重要な役割を演じている。没後刊行された歌論集『閑人囁語』の言葉を借りれば「あ、あれは俺だ」という風情で詠われているのである。歌を通して生きた、生きることを見つめつけた歌人だった。